

# 社会と教育との 関係性を追究し、 これからにつながる 示唆を得る

Navigator

文学部 / 教育学専攻

## 高木 雅史

教授

Masashi Takagi

高木 雅史 (たかぎ まさし)

1964年、愛知県生まれ。愛知県立稲沢東高等学校卒業。愛知教育大学教育学部教職科教育学教室卒業。名古屋大学大学院教育学研究科博士前期課程修了、同研究科博士後期課程満期退学。福岡大学人文学部教授、同大学教職課程教育センター長等を経て現職。

多くの人との出会いの中で  
自らの視野の狭さを実感

教育学とは、子どもから高齢者まで人間の生涯にわたる「成長」をテーマとする学問である。そのフィールドは、学校はもちろん、家庭や社会など私たちを取り巻く環境のさまざまなシーンに広がり、教育哲学や教育史、教育社会学、教育行政学、教育方法学など、多様な研究領域が揃っている。けれどもこうした教育学の内容を把握している人は、それほど多くはないのではないだろうか。若き日の高木先生もそうだった。

育のあり方を追究する人たちと交流する中で、自分も少しずつ関心を持つようになっていきました」当時は「管理教育」が社会問題化した時期であったのに、自分は中学高校とまさにその只中で過ごしてきたのにもかかわらず、何の問題意識も持たずにここまで来てしまった。視野の狭さを実感した先生は、教育について本腰を入れて学ぼうと決意する。

「優生学IIナチス・ドイツ」に  
留まらない影響の広がり

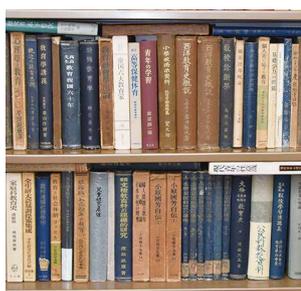
卒業論文のテーマは、キリスト教思想家・文学者の内村鑑三(1861-1930)。教育勅語に敬礼をしなかったという、いわゆる不敬事件で有名な内村の思想を取り上げたことをきっかけに、先生は社会ダーウイニズム(自然淘汰・生存競争は生物進化の原理であることから、人類社会の普遍的原理でもあると見なす思想)を知る。社会ダーウイニズムから教育思想がどのような影響を受けたのかに興味を持ち、明治期以降の教育雑誌を資料に研究を進めていく中で、大正期に入ると「優生学」に関する記事が現れることに先生は気づいた。

優生学とは、遺伝的な側面に働きかけることで人間の資質の向上や、悪化防止をさせようとする学問や思想、運動のことだ。イギリスの遺伝

学者ゴルトンが1883年に提唱し、日本では大正期の1910年代に入ってから広まったといわれる。ナチス・ドイツを思い起こす人もいることだろう。遺伝要因を重視する優生学は、後天的な働きかけである教育とは対極をなすもの、という思いが先生にはあったという。しかし教育雑誌の検証を進めると、遺伝的な能力の優劣によって人間を分類する思想を正当化し、日本人をより優れた人種とするために優生学と教育を融合、または車の両輪と位置付けるべき、という議論が多く展開されていた。また、特定民族や障がい者への熾烈な迫害を行ったナチス・ドイツにつながるような人種改良論の一方で、「優れた子を産みたい」という人々の日常意識にも影響を与え、優生思想は日本社会の中でも一定の支持を獲得していたことを知る。

日本人の日常意識の中にも  
浸透していった優生学

「日本では大正期に社会構造が大きく変化し、都市部ではサラリーマン層が生まれました。労働力を多く



明治期以降の日本教育史を研究する先生の本棚には、時の経過を感じさせる資料がぎっしりと詰まっている。



研究に使用している資料は、先生が1冊1冊収集した貴重なもの。

確保しておく必要がある農村部では家族形成は従来通りの多産多死型でしたが、サラリーマン家庭では父親の収入だけで家族の生活を賄うため、子どもがたくさんいては困る。また、自立させるためには学歴を身に付けさせなければならぬ。お金がかかりますから、やはり子どもは多くない方が望ましかったのです。少なくとも産んで大切に育てるスタイルが成立したが、出生数が少ないからこそ、「良い子」を産まなければならぬ。そういった社会背景の中でサラリーマン層を中心に優生思想は浸透していった。1940年には、病氣など遺伝的に問題があるとされる者に不妊手術を行うことなどを定めた国民優生法が公布された。

や家族計画運動が行われ、「授かるもの」から「つくるもの」へ社会の子どもも観も変わっていった。

確かに、優生学のもとに家族形成のあり方を統制しようという政策が実施された。雑誌などを通じての啓蒙・普及も図られた。しかし、優生学を基盤にもつ受胎調節や家族計画が社会的に広がっていった背景には、「優れた子どもを産むため」という個々の家族の選択があった。優生保護法は1996年、優生思想が削除される形で母体保護法に改正されたが、家族個人にまで浸透した「不良な子孫の出生防止」という考え方が社会から排除されたわけではない。この、いわば「内なる優生思想」問題の考察に先生は取り組んでいる。

「今日、生殖補助医療や出生前診断といった医療技術の進展を背景に、優生学をめぐる議論は改めて活発化しています。良い子が生まれてほしい」という親の素朴な願いが根底にあるとしても、そのためにどこまで人が手を加えることが許されるか。その志向やそれを実現する技術をどう制御するか。内なる優生思想が教育にもたらす影響について歴史から学び、今後の可能性とリスクを検討しておくことは重要な教育的課題だと捉えています」と先生は語る。

### 教員の仕事には繰り返し返しの面も。けれど自ら変わり続ける意識を

先生が担当する演習には、教育の歴史はもちろん、学力低下や教員の

多忙化、いじめなど、現代の教育において問題とされているテーマに関心を抱く学生も集まるそうだ。先生は、それぞれがテーマを追究する際に歴史的視点を有効活用できるように演習内容を構成しているという。

「本学は、明治期以来の教育雑誌を現物や復刻版の状態で多数所蔵しています。演習ではそれを活用し、学生が関心を抱くテーマがこれまでの時代の中でどのように問題視され議論されてきたのか、一応の結末に至ったかを読み解いていきます」今日的な問題であっても、歴史的視点をういてテーマを相対化することで、本質を把握しより深く理解できるようになる。それが先生のねらいだ。

先生をはじめ教育学専攻の教員は、教職課程との関わりも深い。ご自身も小学校・中学校・高校の教員免許を取得している先生に、教職を目指す学生へのアドバイスもお聞きした。「子どもについて学ぶことはもちろん、子どもを育む背景となる社会についても関心を持つよう心がけてほしいですね」親の考え方や家族関係は社会の状況によって変わり、その時々、子どもの位置付けも変化するのでそれを認識することが大切、と先生は言う。「同時に、自ら学び続ける姿勢も不可欠です。教員の仕事は繰り返し返しの部分も大きいですが、子どもにとってはすべてが新しい知識であり体験。その気持ちに寄り添えるよう、教員自身、常に変わる意識を持つことが何より重要だと思います」



## “Close up,”

**現在の研究テーマを教えてください**  
教育言説・実践の社会史的研究、優生学と教育の関係史、受胎調節指導・家族計画運動と教育の関係史などを研究しています。

**ご趣味は？**  
全国各地の古書店・古書市巡りです。主に、明治期から戦後初期（1950年代）くらいまでの出版・育児・教育に関する書籍・雑誌等を収集しています。また、都内各地の雑貨や骨董、インテリア関係ショップを巡る散歩も好きです。

**どんな高校生でしたか？**  
実家を出て自活することばかり考えていました。文学部に行って推理小説作家になろうと思い、万年筆を買い原稿用紙を前にして日々を過ご

しましたが、唸っているばかりで筆が進まないまま、気がついたら高校生活が終わっていました。

**高校生の頃の夢は？**  
推理小説作家か新聞記者になること。

### お薦めの本を3冊あげてください

- 『大学でいかに学ぶか』 増田四郎（講談社現代新書）
- 『花疲れのあなたに—ある青春の記録—』 原哲志（風媒社）
- 『東大で上野千鶴子にケンカを学ぶ』 逢洋子（ちくま文庫）

大学・大学院において学んだり研究したりすることの意味を問い、悩み、試行錯誤する体験を描いた3冊を選びました。できれば3冊読んで、何が違って何が変わっていないか、自分たちに通じる点は何かを考え、「学ぶことの意味」についての認識を深めて欲しいと思います。

**先生にとっての“特別な一冊”は？**  
『花疲れのあなたに—ある青春の記録—』 原哲志（風媒社）  
私の先輩の遺稿集です（1985年に23歳で急性骨髄不全により逝去）。学問への志や姿勢に

強い憧れや畏れを感じ、刺激を受けながら大学生活を過ごしました。

### 高校生へメッセージ

『人は自分が期待するほど、自分を見てはくれないが、がっかりするほど見てはくれない』（見城徹・藤田晋、講談社）という本のタイトルが気に入っています。うまくいかないことも多々ありますが、誰かがきっと見ていてくれると思いつつ、コツコツ努力することの重要性を意識し続けて欲しいと願っています。



出版された年代や著者達の専攻分野、性別、立場等が大きく異なる3冊。比較しながら読んでほしい、と先生。左端の“特別な一冊”は、先生が教育学研究を志すようになる重要な契機となった。

まだ冷戦下であった1987年、博士課程前期1年の夏休みにナチス・ドイツが作ったアウシュビッツ強制収容所を訪れたことも、先生が優生学を意識するきっかけに。

